奏でる魔法

晴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

奏でる魔法

【作者名】

晴海

【あらすじ】

れる。 珍しい音楽を知る彼は重用されていく事になる。 音楽の才能溢れる一人の青年。 その世界では音楽に魔法が宿り効果を表すという。 彼は失意の中、 異世界へと召喚さ

プロローグ (前書き)

この物語はフィクションです。

せん。 定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありま 実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特

また曲の解釈はあくまで個人の意見です。

響いていた。 長かった静寂は破られ、 止むことが事のなさそうな拍手の雨が鳴り

音に促されるように立ち上がり顔を上げれば、 り興奮した面持ちでステージを見つめている。 多くの人が立ち上が

は息切れしながらも小さく呟いた。 それに対し、むず痒い様な感覚になりながらも確信をし、 椎名直樹 Unagabe

はぁ、 はぁ、 はあ.....やった、 完璧だ」

これ以上のものはないという演奏ができた。

ノコンクールであり、 ピアニストを目指す者には最高峰の登竜門と

このコンクールはとある有名な作曲家兼ピアニストを記念したピア

いわれている。

今日は決勝の最終日。 優勝の確信があった。

いや、 思っていた。

なっ、 どうしてっ」

審査結果を聞き気付けば僕は叫んでいた。

何んで僕が選外なんですかつ」

聞くものによっては自意識過剰とも取れる発言。

不快な顔をする人の姿が見える。 ただ侮蔑の色合いが濃い。

そうしていると一人の白人男性が近づいて来る。

君の様な人間が弾いた音で偉そうな口を叩かないでくれるかね。 何を喚いているんだ!イエローが調子に乗らないで貰いたいね。

イエローと聞いた瞬間、 僕の中で何かが切れ、 悪態をつく。

は見苦しいですよ。 イエローにあなた方ホワイトを超える演奏ができたから。 「結局あなた方は僕の演奏を聞いて恐れたんでしょう。 僕のような 男の嫉妬

ょ 「はっ ふざけるな!ちょっと良い演奏ができるからと調子に乗るな

すね。 殿方は凝り固まった選民意識の上に胡座を組んでるに過ぎないんで あれ?演奏が良かったことは認めてくださるんですね。 貴

さすがに言い過ぎたようで、一瞬の間が空き

「「っこの餓鬼!!」

殴られながらも僕は呪った。という怒号の元僕は殴り飛ばされた。

こんな時代でなければ.....と

家との間に軋轢が生じる。 アジアの大国が発展した結果、 まず従来どおりの権利を主張する国

多くの時間は必要としなかった。 世界最大の人口を誇る国が、 最大の武力を誇る国と戦争をするまで

だ。 結果は新興戦力が負け、 黄色人種は見下されるようになってい たの

つまり選外の理由は差別を受けた結果である。

僕達の国は表面上だけかもしれないが中立を保っていた、

国側だったのだ。 しかし諸外国には関係が無いようだ。

音楽は国境を超えるなんて嘘だと今なら断言できる。

今の世の中では世界で活躍することができないのだと痛感した。

帰国後、僕は抜け殻のようになっていた。

楽一家といわれる環境で育った僕には、結局のところ音楽しか残っ ておらず、 親は音楽で僕を癒そうとするが余計に落ち込むだけであったが、 国内で音楽活動を始めようとした。

メディアに取り上げられ国内での活動も失った。 不服で暴行を行ったというレッテルを貼られた僕に専門雑誌や一部 しかし前評判高く外国に行ったものの奴等の情報操作に より順位が

養を過ごすことにした。 そして逃げるように田舎でヴァ イオリンを作っている祖父の家で休

祖父母は何も言わずヴァ イオリンの作り方を教えてくれ、 自分たち

の作っ た物を試しに演奏するという毎日となっ た。

関しては世界トップレベルであるが.....) た為、 専門のピアノは父の影響で始めたが、 両方とも人並み以上には弾くことができる。 母はヴァイオリニストであっ (最もピアノに

将来そちらに進もうかなと考えられるほどに。 しかし今は弾くことより作曲や楽器を作ることに興味が出てきた。

そう結局、音楽からは離れなかった。

約2年間、試行錯誤し様々な曲を書いた。

偽名で曲を発表しそこそこ評価を得る事もできたが、 また挫折した。

偽名がばれたのである。

今まで評価されていた曲も見向きもされなくなった。

別に名誉なんかが欲しかった訳ではない。

純粋に曲を聴いてほしかっただけなのに、 この世界はそうは見て

れないらしい。

そんな失意の中、 書き上げたのが「G1obe‐t r o t t i n g

・世界漫遊・」である。

が世界中で演奏され世界を駆け巡るという意味を込めた。 死後でも良い、この曲が評価されることを、 自分の代わりにこの曲

弾くことにした。 そしてこの曲は祖父が2年をかけ完成させたヴァイオリンに合わせ

祖父のヴァイオリンも偏見により世界では一部のもの ていない。 祖父もまた同様の経験をしているのだ。 に しか使用さ

そして僕は奏で始める。 まだ何かできるかも しれないという期待と、

もう全て諦めてしまおうかという心の葛藤にけりをつける為に。

この12分間の曲を弾いている内に何故かステージ上でスポットラ イトを浴びている気がした。

どこからかピアノの音もする。

まだ未発表の自分の曲なのだから祖父達が知っているはずも無いの

だが。即興で合わせにきたのだろうか。

しかし上手くアンサンブルしているので心地よくなる。

そして演奏中にもかかわらず祖父母が僕に声をかけている気がする。

マナー違反だ。

そんなにいい出来なのかと少しにやけながらも演奏を続け、

わって目を開けると.....

僕は本当にステージに立っていた。

静寂の中、演奏準備を始める。

もう何度繰り返したか分からないこの作業。

私は満月の夜の習慣を始める。

「はぁ本当に呼んだりできるのかな?」

口に出してしまったことで駄目になる気がしてふと出てしまった言葉にギョッとする

もう覚えてしまっているので必要ないけど、これも習慣。 私は疑念を振り払いながらピアノで譜面を立てる。

元々成功する確立が低いのは知っているし、 とんでもない偶然が無

ければ成功しない事も分かってはいる。

事実、今まで一人しか呼ばれた事がない。

それもその時は完成した曲を弾いていた、 宮廷音楽師がたまたま効

果を知らず呼び出したに過ぎない。

分かってはいるけどそろそろ出てこいって話よね。

とか言いながらも毎回欠かさず弾いている。

事情を抜きにして私はこの曲が好きだった。

凄く落ち着くのだ。

悩んだ時は満月でなくても弾いてしまう。

透き通るような旋律で、 私自身が世界を飛び回っているような気分

になれる。

がまるで神にでもなったかのような神秘的な気分にもなれる。 それにこの塔のステー ジで月の光を浴びながら弾いていると、 自分

そうこう考えている内に準備が終わり静寂が降りる。

フゥー

と深呼吸をして、 気持ちを込めながら旋律を奏でる。

きる量が変化する。 魔力は演奏しているときの感情移入の度合いにより、 込める事ので

に落ちる。 ステージに配置されたピアノから音が鳴ればこの領地の人々は眠り

もう何十年と続いた日常。

そしてその人々の祈りの分も魔力となる。

この曲は召喚魔法曲の

しかしこちら側だけでは駄目なのだ。 いつもの様に 一つの失敗すら有り得な

そもそもこの曲が異世界に今も有るとも限らない。 そして打ち合わせも行えない異世界と同じタイミングで演奏する事。 奇跡にふさわしい確立。 成功の条件は呼ばれる側も呼んで欲しいという気持ちが有る事。

それでも毎回欠かすことはない。 この国を思えばこそ、

の領地、

辞めることは出来ない。

何年も何年も繰り返し記憶した譜面。

譜面には意味は無い。

るූ しかし時には言葉としての意味を超え、 物語を紡ぎ出すこともでき

(力を貸して

(あなたが許すなら)

(あなたの望むものは捧げます

(だからあなたの音楽を

(力を)

(貸して)

塔の窓から射す月光が舞台の真ん中がほのかに光らす。

そこに扉のようなものが見える。

集まった魔力が徐々にその扉を構成していくのを感じる。

曲がもう間もなく終わってしまう。

私達を、領地の民を守って。

今この国は戦争をしており、 しかも情勢が良いとは決して言えない。

相手は隣国ベクトロス皇国。 力を尽くしていたのだが2年前賢王が死を遂げ国が変貌してしまう。 先代の王は賢王であり自国の内政に

た。 現王は敬虔なアグーラ教の信者であり、 息子が後を継いだのだが、この王が曲者だった。 いや、正確にはこの王の後ろにいる教皇が曲者であった。 傀儡と成り下がってしまっ

戦争は私たちが異教徒というだけで始まった。 子ではあるが異教徒ではないというのに。 この国は政教一致体制ではなく、 そんな事は誰だってわかってはいるけど、 宗教の自由が認められており異分

聖戦である。」

と教皇が言えばそれを信じてしまう。

尊心が高い。 対して私達の住むリスロン公国国王ヴァレリー は武を誇っており自

で戦線を保たせたのだ。 攻め入られたと知った時、 近くの領主に対応させ自分が出撃するま

負けそうになれば投入という戦力の逐次投入という私でも分かる愚 の骨頂を犯したのだ。

その結果、国土の8分の1を取られてしまう。

私達の兵は優秀だと思うが数が少ない。 数と力もさることながら指揮官が優秀なのだ。 むしろそれだけで助かったのは隣の領主のおかげだった。

一般的には力は数だと思う。

だというのに逐次投入のせいで多くの領地の男性の命がなくなった。 もう満足に戦う事もできない。

そしていつ再度侵攻してくるかわからない。

母を失いたくない私は生まれた土地を荒らされたくない

ここを愛している

お願い力を貸してっ

ステー ジに光が溢れる

今度はこちらの世界へ留めなくちゃ。召喚の第一段階はクリアしたみたい

凄く上手いやって来た人との共演が始まる。

聞いたとのない音色

光が集まり形を形成していく

そして曲が終わる

恐る恐る顔をあげる。

ステージの上には黒髪の人がいた

男の人だ

二十歳前後と言ったところだろうか?歳は私より少し上のように見える。

はあ、はあ、はぁ.....やったわ」

思わず顔がにやけてしまう。

とうとう成功した。

.....疑ってごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n2716y/

奏でる魔法

2011年12月15日23時51分発行